

Title	近畿方言におけるネン・テンの成立 : 昔話資料を手がかりに
Author(s)	野間, 純平
Citation	阪大日本語研究. 2014, 26, p. 51-69
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/50082">https://hdl.handle.net/11094/50082</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 近畿方言におけるネン・テンの成立

—昔話資料を手がかりに—

## The formation of *nen* and *ten* in Kinki dialect: Based on an examination of a corpus of folktales

野間 純平  
NOMA Jumpei

キーワード：近畿方言、ネン、テン、ノダ、昔話資料

### 要旨

本稿では、近畿方言におけるノダ相当形式であるネンとテンの成立過程について、昔話資料をもとに考察する。昔話資料に現れるノダ相当形式を調査した結果、以下のような特徴があった。

- ① ンヤなどのン系の多くは過去形に後接し、ノヤなどのノ系は相対的に非過去形につくことが多い。
- ② ネンとテンの使用には地域差があり、ネンは使わないがテンは使うという地域がある。

そして、これらのことから、ネンとテンの成立過程について、以下のように考えた。

- ③ ネンとテンは別のルートで成立した。
- ④ テンはタンヤが母音変化、ヤの脱落という過程を経てできた。
- ⑤ ネンは、ノヤが母音変化したネヤが、テンからの類推でできた。

これらのことは、ネンが過去形に後接できず、意味的にテン＝タ＋ネンとなっている非対称的な現在の体系への説明になりうる。

### 1. はじめに

大阪方言を中心とする近畿方言には、次のようなネンやテンといった形式が存在する。

- (1) 今から学校行くネン<sup>1)</sup>。
- (2) 今学校行ってきテン。

これらは共通語の「ノダ」に対応するとされており、「ノダ」に対応する「ノヤ（ンヤ）」に置き換えられる。ただし、テンは「タンヤ」に対応する。

- (3) 今から学校行く {ンヤ／ネン}。
- (4) 今学校行って {きたンヤ／きテン}。

このように、ネンとテンは「ノダ」と意味的には置き換えが可能だが、「準体助詞+コピュラ」という構成にはなっておらず、形の上では「ノダ」には対応していない。それは、これらが「ノダ」が変化してできた形式であるからである。

しかし、このネンとテンがどのように成立したのかはあまり明らかにはされていない。そこで、本稿では、昔話資料をもとに、この2つの形式の成立過程について考察することを目的とする。具体的には、以下の2点を明らかにする。

- ① ネンとテンの使用量には地域差があり、ネンはほとんど使わないがテンはよく使うという地域が存在する。
- ② そこから、ネンとテンの成立にはそれぞれ別の要因が働いていると考えられ、ネンよりもテンのほうが先に発生したと考えたほうが自然である。

本稿の構成は以下のとおりである。まず2節で、本稿で取り上げるネンとテンの特徴について説明し、3節ではそれらの成立過程に関する先行研究をまとめる。4節では、調査の概要について説明し、5節では昔話資料における近畿方言のノダ相当表現の特徴をまとめる。そして、それをもとに、6節ではネンとテンの成立過程について考察する。最後の7節はまとめである。

## 2. ネンとテンの特徴

まずは、本稿で取り上げるネンとテンについて説明する。本稿の冒頭でも述べたように、ネンは「ノヤ」、テンは「タンヤ」にそれぞれ置き換えられるが、形の上では対応していない。以下、野間（2013）をもとに、ネンとテンの形式的特徴（2.1節）と意味的特徴（2.2節）についてまとめる。なお、ここでまとめるのは、基本的に大阪方言におけるネンとテンの特徴である。

### 2.1. 形式的特徴

ここでは、ネンとテンの形式的特徴をまとめる。以下、接続（2.1.1節）、形態（2.1.2節）、ヤの後接（2.1.3節）に分けて説明する。

#### 2.1.1. 接続

ここでは、ネンとテンの接続について整理する。以下に示すように、ネンは述語の終止形につき、過去形には後接できない。一方、テンは過去マーカーの「タ」とパラディグマティックな関係にある。

- (5) 今から学校行くネン。            ((1) 再掲)

- (6) あれ私の学校やネン。  
 (7) a. 今学校行ってきテン。 (2) 再掲  
       b. \*今学校行ってきたネン。  
 (8) a. ここ昔は学校やっテン。  
       b. \*ここ昔は学校やったネン。

(5) と (6) はネンの例で、(5) は動詞述語、(6) は名詞述語についている。名詞述語の場合はコピュラを必ず介し、終止形に後接する。しかし、(7b) や (8b) のように、述語の過去形に後接することはできず、その場合は (7a) や (8a) のようにテンを使用する。これらを見るとわかるように、テンは過去マーカ―と「ノダ」に相当する意味の両方を持っており、いわば「テン=タ+ネン」といえる。そのため、テンと過去マーカ―の「タ」は述語への接続のしかたが同じで、パラディグマティックな関係にある。つまり、ネンとテンは述語への接続のしかたが異なるのである。具体的には、ネンは終助詞などと同様に、述語の終止形につく接語 (clitic) であるのに対して、テンは「タ」などと同様に、拘束形態素につく接辞 (affix) ということになる。

### 2.1.2. 形態

次に、ネンとテンがとる形態についてまとめる。本稿の冒頭でも述べたように、この2形式は基本的に「(タ) ノヤ」で置き換えることができるが、「ノヤ」のように「準体助詞+コピュラ」の構成にはなっていない。そもそも、コピュラらしき形式を内に含んでおらず、したがって、活用することもない。

- (9) 行きたくて行く {ンヤナイ/\*ネンナイ}。  
 (10) 行きたくて {行ったンヤナイ/\*行っテンナイ}。

(9) と (10) において、ノヤは否定形をとっているが、ネンとテンにはそれができない。

### 2.1.3. ヤの後接

前節で述べたように、ネンとテンはコピュラを含んでいないため、活用しない。しかし、コピュラが後接して、それが活用していると考えられる例も存在する。

- (11) そうや、今日補講あるネンヤッタ。  
 (12) 今日補講あっテンヤロ。  
 (13) あ、今日補講あるネンヤ。  
 (14) あ、今日補講あっテンヤ。

(11) と (13) はネンにヤが、(12) と (14) はテンにヤが後接している例であり、(11)

は過去形、(12)は推量形になっている。この活用のしかたは、当該方言のコピュラの「ヤ」と同じであり、ネンやテンにコピュラが後接しているように見える。

しかし、本稿では、このヤをコピュラとは考えない。その根拠は、「カ」と「デス」に置き換えられないことである。当該方言の名詞述語文においては、Yes-No 疑問文を作る際にはコピュラは現れず、その代わりに「カ」を用いることがある。

(15) 明日は雨 {\*ヤ/\*ヤカ/カ} ?

それと同様に、ノヤも Yes-No 疑問文のときにはヤを脱落させ、代わりに「カ」を使うが、ネンとテンに後接するヤは「カ」に置き換えられない。

(16) 今日補講あるンカ?

(17) \*今日補講あるネンカ?

(18) \*今日補講あっテンカ?

また、コピュラは丁寧体になると「デス」になるが、ネンとテンに後接するヤは「デス」に置き換えられない。

(19) 今日補講あるンデス。

(20) \*今日補講あるネンデス。

(21) \*今日補講あっテンデス。

以上の理由から、本稿では、ネンとテンに後接するヤはコピュラとは考えない。とはいえ、(11)や(12)のように活用することを考えると、やはりコピュラの性質も併せ持っていると考えられる。このことは、6節で成立過程について考察する際に再び論じるとして、ひとまずネンヤやテンヤは、ネンやテンにコピュラが後接したものではないと考え、「ネンヤ」「テンヤ」でそれぞれ1つの形式としておく。

## 2.2. 意味的特徴

ここでは、ネンとテンの意味的特徴について考える。松丸(1999)や野間(2013)は、野田(1997)の枠組みを援用しているが、それによると、ネンやテンは、対事的モードの用法は持たず、対人的モードの用法に特化されている。

対事的モードの用法とは、(22)や(23)のように、話し手が命題の事態を把握したことを表す用法であり、聞き手を必要としない。一方、対人的モードの用法とは、(24)や(25)のように、話し手が把握している命題内容を聞き手に提示する用法である。

(22) あ、あいつたばこ吸う {ンヤ/\*ネン}。 【対事的】

(23) あ、雨もう {やんだンヤ/\*やんデン<sup>2)</sup>}。 【対事的】

(24) (どこに行くのかと聞かれて) 今から学校行く {ンヤ/ネン}。 【対人的】

(25) (どこに行っていたのかと聞かれて) 今学校行って {きたンヤ/キテン}。

【対人的】

これらの例文が示すとおり、ネンとテンは対事的ムードの用法は持たない<sup>3)</sup>。

### 3. ネン・テンの成立に関する先行研究

前節では、ネンとテンの特徴についてまとめた。本節では、これらがどのように成立してきたかを論じている先行研究をまとめる。多くの先行研究は、ネンとテンの成立過程を別々に論じている。本節でも、ネンの成立過程に言及している先行研究 (3.1 節) と、テンの成立過程に言及している先行研究 (3.2 節) に分けて整理していく。そして、それを踏まえて、本研究における問題のありかを述べる (3.3 節)。

#### 3.1. ネンの成立について

ネンの出自に関しては、前田編 (1965) や神部 (1996) など、多くがノヤにその源を求めている。前田編 (1965) は、ノヤの変遷過程を次のように記述している。

(26) ノヤ→ネヤ→ネー→ネン→ネ

これに対して、神部 (1996) はノヤからネンへの変化の動機として、「ヤ」を脱落させることによって断定の意味機能を薄めるためということが想定でき、その際にノがネに変化したと考えている。また、尾上 (1999) や、上方落語のデータを用いた小杉 (2003) では、ノヤ→ネヤ→ネンというプロセスでネンが成立したと述べている。

木川 (2001) は、これらの先行研究を踏まえた上で、ノヤからネヤへの変化は、ソヤ→セヤ (共通語の「そうだ」) という音変化と同様のものだとして認めているが、その先の変化については、(26) のような変化は考えにくいとしている。その先は様々な可能性が考えられるとして、木川は明確な結論を出していない。

#### 3.2. テンの成立について

テンの成立については、「タンヤ」からテンができたとする説 (前田編 1965、神部 1996) と、過去マーカの「タ」がネンからの類推によって形を変えたとする説 (尾上 1999) の 2 つに大きく分けられる。

前田編 (1965) はテンの成立過程を「タンヤ→テンヤ→テン」のように想定している。そしてその変化の要因として、主として女性が「『や』止め」「『た』止め」の物言いを避けようとするという事情が考えられるという。神部 (1996) も、テンの出自をタンヤに求めている点は同じだが、前田編 (1965) のように、タンヤとテンの間にテンヤを想定するの

ではなく、「タンヤ→タン→テン」という過程を想定している。タンヤからタンになるときに「ヤ」が脱落することで、タンヤが内包していた断定性が、タンとテンでは希薄になっているという。

一方、尾上 (1999:37) は、テンの出自に関して、次のように述べている。

(27) 「ネン」という語形は、ノヤ→ネヤ→ネンというように、その由緒正しい生まれをたどることができるが、「テン」の方はそれができない。「あったノヤ」がどう転んでも「あっテン」という形にはならない。ではどうして「あってん」「行ってん」という形が生まれたのか。それはただ、「あった」「行った」の「タ」を、「ネン」の en 音にそろえて「テン」にしかただけのことである。

つまり、テンの成立において、タンヤは関係なく、単に過去マーカーの「タ」が、ネンからの類推によってテンになったというわけである。木川 (2001:273) も「タがテになったとは考えにくい」として、尾上の説を支持している。

### 3.3. 問題のありか

以上、近畿方言のネン・テンの成立過程について言及している先行研究をまとめた。しかし、それらには次のような問題点が残されている。

- ① ノヤが変化してネヤになったのだとしても、そこからネンへはどのように変化したのかが明らかでない。
- ② テンの成立について、タンヤを出自とするという説と、ネンからの類推であるという説はどちらが妥当か明らかでない。

それぞれ3.1節と3.2節でまとめた先行研究の問題点である。さらに、次のような問題点も残されている。

- ③ 述語が非過去形のときは接語のネン、過去形のときは接辞のテンという非対称的な体系になっているのはなぜか。

2.1.1節で述べたように、ネンとテンは接続のしかたが互いに異なっている。このことは先行研究でもよく言及されているが、それがなぜなのかについては説明されていない。本稿では、この非対称的な体系が、ネンとテンの成立過程にも関係すると考え、その説明を試みる。

以上に述べたような問題を明らかにすることを本稿の目的とし、その手段として、昔話資料を用いた調査を行う。次節では、その調査概要を述べる。

#### 4. 調査概要

本節では、調査概要について述べる。本稿でデータとして用いるのは、『読みがたり各県のむかし話』（日本標準）である。これは、1973～1978年に刊行された『各県のむかし話』の改訂版として2004～2006年に刊行された（各県1巻、全47巻）。各県の国語教育関係者らによって編集された昔話集であり、大部分が方言で書かれているが、教育図書的な性格を持つため、差別的な表現を改めるなど、編者の手がかかり入っていると思われる。

本稿において、この『読みがたり』をデータとして使用するのには、本稿の分析対象であるノダ相当形式が現れやすいからである。一般的に昔話は、語り手が聞き手に対して語って聞かせるというものであり、自然談話における雑談などとは異なったスタイルになると考えられる。日高（2013a, b）によると、昔話の「語り」において、文末に伝聞形式およびノダ相当形式が現れるかどうかには地域差があるという。そして、日高のデータによると、近畿地方ではおおむねノダがよく現れている。このことから、より多くのノダ相当形式の用例を集められるという点で適していると言える。一方、方言研究によく用いられる談話資料では、親しい人どうしが昔の習慣や思い出について話していることが多く、ノダ相当形式が現れにくいことが多い。この点において、本研究において昔話資料を使用する価値はあると言える。

なお、本稿では、全部で47都道府県ある『読みがたり』のうち、近畿2府4県（大阪・京都・兵庫・奈良・和歌山・滋賀）のものを用いる。これらの府県のデータの分量と地域区分を表1に示す。

表1の文の数を見ても、各府県とも1500から1800くらいの間に収まっており、大きなずれはないことがわかる。表1を見ると、各府県の昔話は、採話地が1地点に偏っているのではなく、府県内のほぼ全域に散らばっていることがわかる<sup>4)</sup>。ただし、表1の地域区分については、本に書かれているものもあれば、そうでないものもある。後者については、採話地をもとに区分した。

なお、ここでいう「文の数」とは、地の文のみを数えている。これは、本稿でデータとして用いているのが地の文のみだからである。昔話は物語なので、地の文と会話文の区別がある。地の文は語り手が話していることばである。したがって、その地域に住む話者のことばを反映していると言える。しかし、内容が物語である以上、述語は過去形であることが多くなる。実際、5節でも見るように、ノダ相当形式の用例は過去形が圧倒的に多い。用例を分析するには、このことに注意する必要がある。



表1 各府県の『読みがたり』の分量

府県	地域	話数	文の数	府県	地域	話数	文の数
大阪	豊能	4	146	京都	丹後	18	564
	三島	6	189		丹波	10	409
	大阪市	6	256		京・山城	16	526
	北河内	13	397		合計	44	1499
	中・南河内	10	234	奈良	北和	29	642
	泉北・泉南	20	594		南和	31	1043
	合計	59	1816		合計	60	1685
兵庫	北播磨	8	202	和歌山	紀北	16	474
	中播磨	6	230		紀中	31	578
	西播磨	4	95		紀南	18	554
	但馬	13	556		合計	65	1606
	丹波	6	173	滋賀	湖北	20	403
	神戸	2	84		湖東	15	359
	阪神	7	160		湖西	14	452
	淡路	8	276		湖南	16	309
	合計	54	1776		合計	65	1523

一方、会話文の場合、当該地域以外の人々の台詞であることもあるし、話によっては動物や神様といった人物も現れる。このことから、本稿では基本的に地の文のみを対象とする。

最後に、『読みがたり』をデータとして扱う上で注意すべきこととして、昔話のテキストがどの程度話し言葉を忠実に反映しているのかということがある。

(28) むかしむかしなあ。摂津のなにわというところに、子どものないおじいさんとおばあさんがすんでいやはったんやて。 【大阪・大阪市／一寸法師】<sup>5)</sup>

(29) 夜中、どんどをしていると、ブナの木の下またになっているところに、からのどえらい大入道がすわっていたそうや。 【奈良・南和／大入道とやまんば】

例えば、(28) の下線部「という」は、大阪方言では「と」をつけずに「ゆう」と言うか「ちゆう」のように音変化するのが普通である。(29) でも、「ている」が3回出ているが、このような言い方は話し言葉ではない。つまり、語り手が話している言葉ではあるが、書き言葉的な表現が見られるのである。このように、話し言葉の写実性という点で問題があるデータであることは否めない。しかし、このような特徴も、結果を解釈する際に積極的に活用する。

以上の概要で『読みがたり』の調査を行った。次節では、その結果を見ていく。

## 5. 昔話資料における近畿方言のノダ相当形式の特徴

本節では、昔話資料の調査結果をまとめる。まず 5.1 節で現れた形式を整理し、5.2 節でそれらに見られる特徴を述べる。

### 5.1. 昔話資料に現れた形式

6 府県の『読みがたり』に現れたノダ相当形式<sup>6)</sup>は、表 2 のようにまとめられる。

表 2 を見るとわかるように、ノダ相当形式を大きく「ノ系」「ン系」「ノン系」「ネヤ系」「ネン系」の 5 つに分けた。このうちノ系、ン系、ノン系は、「準体助詞+コピュラ」の構成を持っており、準体助詞がノカンかノンかという違いである。一方、ネヤ系とネン系は「準体助詞+コピュラ」の構成を完全には持っていない形式である（野間 2013）。

ネヤ系はその名のとおりにネヤを含む形式だが、ここには音形の似ているニヤも入る。また、ニヤとは別にンニヤという形式もある。

そして、ネン系にはネ、ネン、テンが含まれる。表 2 に示したネの例文は、ノダ相当形式のネとして扱って問題がないと考えられる例だが、非常に判断に困るものも存在する。

(30) ほいたら、菜種をみな引いとつきよったネ。【滋賀・湖東／ちよよもんさん】

(30) のネは、昔話を語って聞かせる場面で用いられているため、ネンとよく似ているが、過去形に後接しているという点で、ネンのバリエーションとは考えられない。終助詞のネであるという解釈も可能である。特に文末では、「ネ」なのか「ネン」なのかの聞き取りが難しく、それに関しての編者の判断がわからないという事情もある。以上のことから、ネの扱いには注意が必要である。

### 5.2. 各形式の分布

ここでは、近畿 2 府 4 県の『読みがたり』からノダ相当形式を拾った結果を表 3 に示す。集計は府県ごとに行っており、いずれも前接する述語の時制で分けている。ここでは、テンは過去形に接続するものとして集計している。各セルには数字が 2 つ書かれているが、左が実数、右が比率である。比率は、各府県の「非過去」「過去」それぞれで 100% になるように計算している。

この結果をもとに、近畿方言のノダ相当形式に見られる特徴や地域差を、ネンとテンの成立に関係することに限ってまとめると次のようになる。

- ① 過去形に後接する場合はン系に集中する
- ② ネンとテンの使用に地域差がある

以下、分けて述べていく。

表2 『読みがたり』に現れたノダ相当形式のバリエーション

分類	形式	例文
ノ系	ノヤ	ところが、ふしぎなことに、どないしても、窓から首がぬけへんノヤ。【奈良・南和／化かされ太郎吉】
	ノジャ	すると、土の下から井戸があらわれ、その井戸から清水がふき上げてくるノジャ。 【大阪・中南河内／ふしぎな井戸】
	ノダ	遠くのほうまでひびきわたるノダそうですね。【京都・丹後／犬のおつかい】
	ノデス	夕べの鐘までに帰るといおしょうさんと約そくが、かしこいシロの心をせめてたノデスわなあ。 【京都・丹後／犬のおつかい】
	ノドス	なんしょ、コイをこうたのは大家さんどちがうのやさかい、たとえそのコイの腹の中から石が出てきたとしても、また、きょうのように小判が出てきたとしても、それは、コイをこうたもんがらうのがあたりまえや、と言わはるノドス。 【京都・京山城／鯉山】
	ノ	おどろいたお吉キツネに、おり悪しく、その家ののき下でねていた犬が、この音で目をさまし、ほえかかったノよ。 【滋賀・湖東／お吉キツネ】
ン系	ンヤ	むかしな、あるところに、ふたりの男が住んでいたンヤ。【和歌山・紀中／徳さん夢みて角さんもうけた】
	ンジャ	全身の力をふりしぼって、お日さまに命令したンジャ。【兵庫・北播磨／朝日長者】
	ンダ	なんぼ言うても、庄エ門さんが歩きだそうとすると、強い力で引っぱられるンダげな。 【京都・丹後／庄エ門さんの話 たった一本ださかい こらえとくれ】
	ンデス	すると、ひとりの男が、のみで金色にかがやくつばな仏さまの手をもぎっているところやったンデス。 【大阪・泉北泉南／泣いた仏さま】
	ンダス	この山車を出す順番が村人たちのきょうみのまとやったンダス。【大阪・三島／安威のとのさん】
	ンドス	あんまり毎晩のことやし、それがとうとう夫の丸右衛門にわかってしもたンドスわ。 【滋賀・湖西／小女郎が池】
	ン	むかし、上神野の庄屋に、ひとりの美しいむすめがあつてよ、おとうさんとふたりつきりてくらししていたンよ。 【和歌山・紀北／おいつほ】
ハン系	ハンヤ	竹やぶの道を行ったらはよう上方へ行けるちゅうハンヤ。【大阪・泉北泉南／話を買う】
	ハンジャ	だれが、こんなよい声でうとうてるのかと、そうつと声のする方へ近づいていきなはると、なんと、サルがうとうとるハンジャ。 【兵庫・丹波／サルむこ入り】
	ハン	けつがやりこいと、けつをぬかれてまうハンよ。【兵庫・神戸／吉さんとガッター】
ネヤ系	ネヤ	ははあ、わしのところで石というねけど、こらまあ、都では石のことを、えっささしていうネヤな、とこれ一つおぼえはった。 【滋賀・湖東／くすりをいっぶくしよけはい】
	ニヤ	むかしなあ、うちのおじいさんがなあ、そう式に行かへったニヤわ。【滋賀・湖南／死人にばけたキツネ】
	ンニヤ	なんやろう、と思うとうちに、こけが美しいものにかわつたンニヤと。【奈良・南和／化かされ太郎吉】
ネン系	ネ	おしょうさん、何がほんなにたくさんあんネなとおもてひよいと見やはつたら、かさの中に、ゆげの上がつた馬のふんがいっぱいあつた。 【滋賀・湖東／おしょうさんと小僧さん】
	ネン	そのころになると、キツネが出てきよってな、ニワトリをいっぺんに、四羽も五羽もとりますネン。 【大阪・北河内／キツネの目じるし】
	テン	そこで、ヒキガエルは、大喜びでそのもちをとって食いよつテン。【奈良・北和／サルとウサギとヒキガエル】

### 5.2.1. ノ系とン系の分布の偏り

表3を見ると、過去形におけるンヤの割合が非過去形に比べて非常に高くなっていることがわかる。同時に、過去形に後接するノ系の割合が非常に低くなっている。このような偏りをもたらすのは、「アルノヤ」が「アンノヤ」になるような撥音便形や否定辞が前接して前接音が「ン」のときにン系が後接できないということが背景にあると考えられる。

(31) 足もとに、一びきのかえるが、じつとうずくまって動こうとしいひんノヤ。

【京都・京山城／蟹満寺の話】

(31) は、ノヤの前が否定辞「ヒン」であり、「ン」で終わっているので、ここでン系を使

表3 近畿地方の昔話資料に現れたノダ相当形式（地の文）

		大阪				京都				兵庫			
		非過去		過去		非過去		過去		非過去		過去	
ノ系	ノヤ	30	28.8%	20	3.6%	31	34.1%	11	4.3%	15	14.4%		
	バジャ	3	2.9%	15	2.7%	3	3.3%	4	1.6%	6	5.8%	4	1.0%
	ノダ			1	0.2%	2	2.2%	2	0.8%	1	1.0%		
	ノデス	1	1.0%	1	0.2%	1	1.1%	1	0.4%				
	ノ	2	1.9%	4	0.7%	4	4.4%	6	2.4%	3	2.9%	1	0.2%
ン系	ンヤ	36	34.6%	469	84.1%	16	17.6%	183	72.3%	51	49.0%	274	66.7%
	ンジャ	1	1.0%	20	3.6%	16	17.6%	21	8.3%	14	13.5%	58	14.1%
	ンダ			1	0.2%	13	14.3%	16	6.3%	3	2.9%	13	3.2%
	ンデス			6	1.1%	3	3.3%	7	2.8%	3	2.9%	11	2.7%
	ンダス			1	0.2%								
ン系	ンドス												
	ン			7	1.3%	1	1.1%	2	0.8%	2	1.9%	48	11.7%
	ン												
ハン系	ハンヤ	9	8.7%										
	ハンジャ									1	1.0%		
	ハン									2	1.9%		
ネヤ系	ネヤ									1	1.0%		
	ニヤ												
ネン系	ネ												
	ネン	22	21.2%							2	1.9%		
	テン	*	*	13	2.3%	*	*			*	*	2	0.5%
合計		104	100.0%	558	100.0%	91	100.0%	253	100.0%	104	100.0%	411	100.0%
総数		662				344				515			
		奈良				和歌山				滋賀			
		非過去		過去		非過去		過去		非過去		過去	
ノ系	ノヤ	23	23.5%	6	0.9%	22	18.6%	1	0.2%	43	30.7%	43	6.7%
	バジャ	4	4.1%			1	0.8%						
	ノダ												
	ノデス												
	ノ	3	3.1%	6	0.9%	6	5.1%	2	0.3%	7	5.0%	6	0.9%
ン系	ンヤ	37	37.8%	454	71.4%	67	56.8%	600	91.2%	67	47.9%	553	86.4%
	ンジャ	20	20.4%	106	16.7%	7	5.9%	21	3.2%	1	0.7%	1	0.2%
	ンダ												
	ンデス												
	ンダス											1	0.2%
ン系	ンドス											2	0.3%
	ン	2	2.0%	5	0.8%	15	12.7%	14	2.1%				
ハン系	ハンヤ												
	ハンジャ												
	ハン												
ネヤ系	ネヤ									3	2.1%		
	ニヤ									8	5.7%	13	2.0%
ネン系	ネ	2	2.0%	10	1.6%							3	0.5%
	ネン	3	3.1%							9	6.4%	10	1.6%
	テン	4	4.1%							2	1.4%		
	テン	*	*	49	7.7%	*	*	20	3.0%	*	*	8	1.3%
合計		98	100.0%	636	100.0%	118	100.0%	658	100.0%	140	100.0%	640	100.0%
総数		734				776				780			

空欄は、当該の用例が出現しなかったことを表し、\*はその環境では出現しないことを表す。

うことはできない。「\*しいひんンヤ」のように撥音が続いてしまうからである。一方、ノ系にはそのような制約はない。そのため、ノ系は撥音に後接する場合に偏って使用されるようになったと考えられる。

6 節の最後でも触れるが、この「過去形にはノ系ではなくン系が後接しやすい」という性質は重要で、タンヤからテンが成立する大きな要因となったと考えられる。

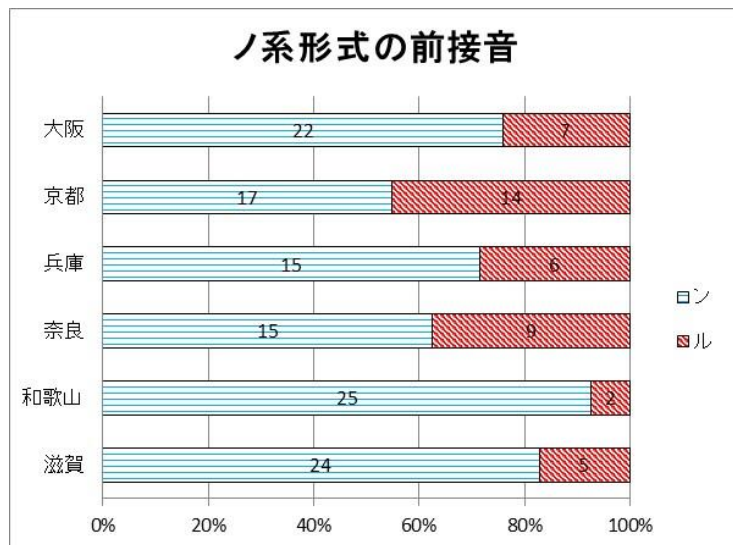


図1 ノ系の直前の撥音便

図1は、終止形が「ル」で終わる動詞にノ系が後接するとき、撥音便化を起こすか否かを集計したものである。「ン」は撥音便化したもので、「ル」は撥音便化していないものである。なお、グラフ内の数字は実数である。この図を見ると、府県によって差はあるが、ノ系の直前の音は、おおむね撥音が優勢であることがわかる。ン系が過去形に後接しやすいのは、撥音に後接できないために、ノ系と音環境の面で相補的な分布をしたからではないかと考えられる。ちなみに、数は少ないが、ノン系はすべて非過去形に後接している。とはいえ、表3を見てもわかるように、ン系は過去形以外にもつくし、過去形につくノ系もある<sup>7)</sup>。完全な相補分布というわけでもないようである<sup>8)</sup>。

### 5.2.2. ネンとテンの差

次に、ネンとテンが使用されている地域を見てみることにしよう。表3を見ると、ネンとテンの使用に大きな地域差があることがわかる<sup>9)</sup>。大阪や兵庫では、ネンとテンが両方使われているが、奈良ではテンが極端に多い。さらに、和歌山ではネンは使われていない

が、テンは使われている<sup>10)</sup>。このように、ネンは使わないがテンは使うという地域が近畿地方にはある。このことは、ネンとテンの成立がそれぞれ別の要因によるものであり、テンのほうが先に成立したのではないかという本稿の主張の根拠となる。以下、次節で詳しく述べる。

## 6. ネンとテンの成立過程

本節では、5 節で述べた調査結果をもとに、近畿方言におけるネンとテンの成立過程について考察する。以下、ネンとテンの成立過程の概要について述べたうえで（6.1 節）、テンの成立過程（6.2 節）とネンの成立過程（6.3 節）に分けて述べる。

### 6.1. ネンとテンの成立過程の概要

5.2.2 節で述べたように、ネンを使わないがテンを使うという地域が近畿地方にはある。このことは、ネンとテンの成立過程が別のルートをとっており、ネンよりも先にテンが成立した可能性を示唆する。それを踏まえて、本稿では、ネンとテンの成立過程を、以下のように想定する。

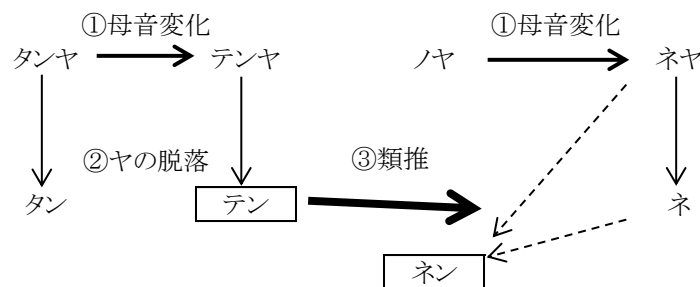


図2 ネンとテンの成立過程

図2におけるネンとテンの成立過程は、大きく以下の3つの段階に分けられる。

- ① 母音変化
- ② ヤの脱落
- ③ テンからネンへの類推

③からわかるように、ネンよりもテンのほうが先に成立しており、テンがネンの成立に関わっているというのが、本稿の主張である。以下、テンとネンに分けて成立過程を考察する。

## 6.2. テンの成立過程

まずは、テンの成立過程について考察する。図2によると、テンは、タンヤが①母音変化と②ヤの脱落という2つのプロセスを経て成立したものと言える。

①の変化は、/a/ から /e/ への母音変化による、タンヤからテンヤ<sup>11)</sup> への変化を指す。この変化をもたらすのは、後接するヤの半母音 /j/ である。また、狭母音 /i/ や /e/ が前接する場合にもこの変化は起りやすい。特に、丁寧体の場合は、狭母音の直後という環境のもと、「マシタンヤ」から「マシテンヤ」の変化が起こる。昔話資料の中にも丁寧体にテンが接続している例が多く、過去形に独自の変化が起こりやすい理由の1つであったと考えられる。さらに、/j/ からの逆行同化<sup>12)</sup> を裏付ける現象として、「\*テンカ」が不適格である点が挙げられる。「カ」は疑問を表す文末詞で、2.1.3 節の(18)にも示したように、「タンカ」は適格だが、「\*テンカ」は不適格である。

(32) もうごはん {食ベタンカ/\*食ベテンカ}。

つまり、タンヤからテンヤへは変化するが、タンカからテンカへは変化しないということである。両者の違いは、ヤが後接しているかどうかである。

このように、タンヤからテンヤの変化において、後接するヤが変化に大きな影響を与えていると言える。ヤの有無という音韻的条件は、平叙文と疑問文の区別という統語的条件とも関係している。つまり、「タンヤ/タン(カ)」という平叙文と疑問文の区別がもともとあり、そこから平叙文のみが独自の変化を遂げたということである。現在でも、テンが疑問文では使えない(野間 2013) のはそのためだと考えられる。

次に、②の「ヤの脱落」である。3.2 節で挙げた前田編(1965)が指摘するように、この背景には、「ヤ」で文を言い終わるのを避けるという事情があったと考えられる。今回調査した昔話資料の中で、平叙文において「ン」で言い切る形が見られた。そしてその多くが兵庫県淡路地方に集中している。

(33) あるとき、ほうぼうに看板を出しといたン。【兵庫・淡路/頭のええ若いし】

(34) タヌキのこっちゃん、銭も、きもんもお手のものや、すぐ浪速行きの船に乗れたン。

【兵庫・淡路/柴右衛門ダヌキ】

今回の資料において、このような用例のほとんどが淡路島に集中したのは、(33) (34) のような「タン」が、淡路島以外では疑問文における「タン(カ)」との同音衝突によって用いられなくなったからだと思われる。淡路島に集中して現れるのは、かつてはもっと広く分布していたと考えられるこの種の「タン」が、近畿の周辺部に残存しているものだと考えられる<sup>13)</sup>。このような「タン」が広く使用されるようになったことで、テンヤからテンが成立しやすくなったと言える<sup>14)</sup>。

### 6.3. ネンの成立過程

次に、ネンの成立過程について考察する。ネンの成立過程には、図2からわかるように、①母音変化と、③テンからの類推が関わっている。

母音変化は、ノヤからネヤへの変化における、/o/ から /e/ への変化である。これは、3.1 節でも言及した、「ソヤ」から「セヤ」への変化と同様のものである（木川 2001）。この変化を引き起こしたのは、タンヤからテンヤへの変化と同様に、後続する半母音 /j/ によるものだと考えられる。これに関しては、(32) で示したのと同様のことが言える。次の (35) のように、「ノカ」は適格だが「\*ネカ」は不適格である。これは、ノからネへの変化に際して、「ヤ」が後続することが条件になっているということである。

(35) 今からごはん食べる {ノカ/\*ネカ}。

なお、ネンの成立過程において、②ヤの脱落が起こったかどうかは定かではない。ネという形式も用いられていることを考えると、ノヤから変化したネヤからもヤが脱落し、ネとなったと考えることもできる。ただし、表3からわかるように、ネは使用頻度が低い。そのため、次に述べるネヤからネンへの変化が、ネを介して起こったか、ネヤから直接ネンができたかは、今回のデータからは判断できない。図2においてネンを指している矢印が破線になっているのはそのためである。

そして、③の類推が起こり、ネンが成立する。先ほど述べたように、ネヤからネンになったのか、ネからネンになったのかはわからないが、どちらにせよ、ネンという音形になるのに、同化などの音変化は考えにくいし、テンのほうが広い分布を示すことも考えると、先にテンが成立しており、そこからの類推が働いたと考えられる<sup>15)</sup>。

なお、2.1.1 節で示したように、ネンが名詞述語に後接する場合、コピュラのヤを介して「学校ヤネン」のようになるが、この形は「学校ナノヤ」から変化したものではない。なぜなら、野間 (2013:70) でも指摘されているように、ネンが成立したとされる大阪方言では、「\*ナノヤ」という形が不適格だからである。また、『読みがたり』のデータにも該当する用例は見られなかった。したがって、名詞につくネンは、他の品詞と同じタイミングで成立したものではなく、まず動詞述語（特に撥音便形や否定形）においてノヤからネンへの変化が起こり、それが名詞述語にもつくようになったと考えられる（ネヤについても同様）。一方、テンの場合は、名詞述語は「学校ヤッタンヤ→学校ヤッテン」という変化のため、他の品詞と同じように変化を起こしたと考えられる。なお、名詞述語につくネンが「ナ」ではなく「ヤ」につくのは、この「ヤッテン」をモデルにしたからではないかと考えられる。



では、なぜ過去形をモデルにしてテンからの類推が行われたのだろうか。1 つには、テンという表現が、その出自であるタンヤよりも意味が制限されており、対人的機能に特化されるようになった(2.2節参照)からということが考えられる。尾上(1999:37)が述べるように、大阪方言においてネンやテンという表現は、「やわらかく、親しく、手の内を開いて話しかける調子が出る」表現であり、コミュニケーションにおいて使いやすく、多用される。先に成立していたテンがそのような意味合いを持つ表現であったため、非過去形でも同様の表現が求められたのではないか。また、野間(2013)でも述べられているように、ネンやテンが対人的機能に特化されていると同時に、その元になったノヤは命題めあての機能に偏りつつある。こういった機能分担をするうえでも、過去形のテンだけでなく、非過去形のネンも必要だったと推測できる。

以上、5.2節で述べた『読みがたり』におけるノダ相当形式の分布の特徴をもとに、ネンとテンの成立過程を考察した。5.2.1節で述べたように、ン系は過去形に後接しやすいことから、タンヤ→テンヤのように「タ」を巻き込んだ状態で変化を起こした。それと同様のことがノヤにも起こり、ネヤになったが、先に成立していたテンからの類推によってネンが成立した。尾上(1999)の言うようにネンからの類推でテンができたのではないと考える。そうでないと、ネンが過去形に後接できない理由が考えられないからである。

## 7. まとめ

以上、本稿では、昔話資料をもとに、近畿方言におけるネンとテンの成立過程について考察した。そして、以下のことを明らかにした。

- ① ネンとテンの使用には地域差があり、ネンは使わないがテンは使うという地域がある。
- ② このことから、ネンとテンはそれぞれ別の要因で成立したと考えられる。
- ③ テンはタンヤからの母音変化とヤの脱落によって成立し、ネンはノヤが変化してできたネヤがテンから類推を受けたことにより成立した。

話者の直感から、また、意味の面から、テン=タ+ネンとみなされることが多かったが、その成立過程は別々のものだということを本稿では主張した。

なお、今回は昔話資料のみを用いたが、4節でも述べたように、『読みがたり』の写実性や、テキストタイプの偏り(地の文のみ)など、この方法に問題がないわけではない。談話資料や歴史的資料など、他のデータも用いて、本稿の主張を検証することが今後の課題である。

## 注

- 1) 以下、作例は当該方言形を漢字かな混じりで表記し、問題となる部分のみをカタカナで表記する。
- 2) 過去マーカ－の「タ」が「やんダ」のように「ダ」になる環境では、「テン」も「デン」になる。
- 3) ただし、野間 (2013:72) でも指摘されているように、終助詞「ナ」が後接して「あ、あいつたばこ吸うネンナ」「あ、雨もうやんデンナ」のように言うことはできる。このことは、対事的ムードの用法とは何なのか、ネンやテン自体に対事的ムードの用法があるのか、といった問題をはらんでいるが、稿を改めて論じたい。
- 4) ただし、表1からもわかるように、地域ごとの分量には差がある。また、府県ごとにいくつの地域に分かれているかが異なる。これらのことは、『読みがたり』をデータとして用いる以上、望ましいことではないが、本稿において地域区分は論にさほど関係しないため、不問とする。
- 5) 以下、昔話資料の用例は、【府県・地域／題名】の形で出典を示す。
- 6) 野間 (2013) では「ノダ相当形式」と「ノダ相当表現」が、形式上の対応があるかどうかで使い分けられているが、本稿では区別せずに「ノダ相当形式」を使用する。
- 7) ちなみに、大阪方言話者である筆者の内省では、過去形にノ系が後接するのは非常に不自然である。
- 8) 野間 (2013:58) では、ノヤは直前の音が撥音の場合に用いられ、それ以外の音の直後では一般的にンヤが使われると述べられている。しかし、表3や図1を見てもわかるように、本稿で用いた『読みがたり』のデータでは、この規則が徹底されているとは言えない。このデータの写実性の問題も関係すると考えられるが、その数から考えると、この時にはまだ現在の規則ができていなかったと推察される。とはいえ、やはり過去形にノ系が後接しにくいというのは、表3からも見てとれるし、小杉 (2003) における上方落語のデータでも、「タノヤ」「タノジャ」は数例しかない。
- 9) 京都でネンとテンが使われていないのは、京都におけるネンとテンは大阪から流入したものであるという中井 (2002) の指摘と合致する。
- 10) 筆者が2010年に和歌山県上富田町で行った面接調査では、テンはよく使うがネンはあまり使わないという回答が複数の話者から得られた。この結果は、今回のデータと合致する。
- 11) 表3ではテンに含めているが、テンヤの用例は少数ではあるが存在する。
  - ・そしたら、何かうめてあっテンヤと。【奈良・南和／宝の化け物】
- 12) 変化する母音と後接する半母音の間に撥音が挟まれているが、近畿方言には、否定辞「ヘン」が前接する述語の母音によって「ヒン」になるような変化（キーヘン「来ない」→キーヒン）もあり、それほど特殊なこととは思われない。つまり、近畿方言では、子音を間に挟んでも同化は起こりうる。
- 13) なお、『読みがたり』の岡山県と香川県のデータにも、以下のような「タン」が見られる。
  - ・しばらくして、はっと気がつくと、もう龍宮に着いとったン。【岡山・備前／金のなる木】
  - ・ほいだら、じゅんじゅん、琴平の町へ入って来たン。 【香川・中讃／タヌキのよめ入り】
- 14) 注11で述べたように、テンヤは今回のデータには少ししか出てこなかった。このことは、テンヤからテンができたという本稿の主張に合致していないように思える。しかし、特に前接音が狭母音の場

合は、タンヤとテンヤが非常によく似た音に聞こえる。だからこそこの変化が起こったのだと推測されるが、『読みがたり』では、タンヤかテンヤか聞き取りがはっきりしない場合は、文字化担当者がタンヤにしたのではないかと思われる。ここには、タンヤのほうが共通語の「タンダ」と1対1で対応するという事情も影響しているだろう。

- 15) 表3を見ると、大阪や兵庫では、ネンは使われているのにネヤが使われていない。これは、今回の資料にネヤがたまたま出てこなかっただけではないかと考えたい。明治後期からの上方落語を調査した小杉(2003)によると、ネヤという形式は明治後期から既に使用されているという。また、木川(2001)の談話データ(兵庫県神戸市・相生市、京都府京都市・山城町)にもネヤは現れている。これもまた、注14で指摘したのと同様に、文字化の過程でネヤがノヤになったことが考えられる。

### 参考文献

尾上圭介(1999)『大阪ことば学』創元社。

神部宏泰(1996)「播磨方言における断定辞の推移—『ネン』『～テン』の成立とその機能—」平山輝男博士米寿記念会編『日本語研究諸領域の視点(上)』pp.63-79, 明治書院。

木川行央(2001)「関西方言における『のだ・のです』に該当する表現をめぐる」『日本語の伝統と現代』刊行会編『日本語の伝統と現代』pp.263-277, 和泉書院。

小杉孝二(2003)「大阪弁『ネン』の変遷—上方落語を中心に—」『地域言語』15, pp.33-50, 地域言語研究会。

中井幸比古(2002)『京都府方言辞典』和泉書院。

野田春美(1997)『「の(だ)」の機能』くろしお出版。

野間純平(2013)「大阪方言におけるノダ相当表現—ノヤからネンへの変遷に注目して—」『阪大日本語研究』25, pp.53-73, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座。

日高水穂(2013a)「『昔語り』に現れる文末表現の地理的分布」熊谷康雄編『大規模方言データの多角的分析 成果報告書—言語地図と方言談話資料—』pp.13-32, 国立国語研究所。

———(2013b)「昔話の『語り』の地域差—文末表現を中心に—」『日本語学会2013年度春季大会予稿集』pp.163-170。

前田勇編(1965)『上方語源辞典』東京堂出版。

松丸真大(1999)「京都市方言における『ノヤ』『ネン』の異同」『阪大社会言語学研究ノート』1, pp.61-73, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室。

## 資料

- 大阪府小学校国語科教育研究会編（2005）『読みがたり 大阪のむかし話』日本標準.
- 岡山県小学校国語教育研究会編（2004）『読みがたり 岡山のむかし話』日本標準.
- 香川県国語教育研究会編（2005）『読みがたり 香川のむかし話』日本標準.
- 京都のむかし話研究会編（2005）『読みがたり 京都のむかし話』日本標準.
- 滋賀県小学校教育研究会国語部会編（2004）『読みがたり 滋賀のむかし話』日本標準.
- 奈良のむかし話研究会編（2004）『読みがたり 奈良のむかし話』日本標準.
- 兵庫県小学校国語教育連盟編（2004）『読みがたり 兵庫のむかし話』日本標準.
- 和歌山県小学校教育研究会国語部会（2004）『読みがたり 和歌山のむかし話』日本標準.

## 付記

本稿は、2013年3月に国立国語研究所にて行われた、JLVC2013（国立国語研究所時空間変異研究系合同研究発表会）にて行ったポスター発表に加筆修正をしたものである。

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（研究課題「日本語諸方言における準体助詞の対照研究」）の助成を受けている。また、昔話資料については、科学研究費補助金基盤研究（B）「日本語諸方言の文法を総合的に記述する『全国方言文法辞典』の作成とウェブ版の構築」（研究代表者：日高水穂）において、方言資料としての有効性を検証する共同研究を行っており、本稿はその成果の一部を報告するものである。